

聖書：コリント人への手紙第二 9：9～15

説教題：ことばに表せないほどの賜物

日時：2025年2月9日（朝拝）

この手紙の 8～9 章はエルサレムの貧しい聖徒たちを支える援助献金プロジェクトについて語っている章で、今日の箇所はその最後の部分です。前回見た 5 節後半から 8 節はこの手紙の中でも有名な御言葉であると思います。教会で使われる献金袋にも良く記されている御言葉であるかと思います。そこで述べられた大事な原則は 5 節後半にあった通り、「惜しみながらするのではなく、祝福の贈り物として用意」ということです。嫌々ながら、強いられて、ケチケチした心で、もったいないと思いがらするのではなく、相手を祝福する積極的な思いで、自らの信仰の現れとして、喜びをもってすること。そうする人を神は愛してくださると 7 節で述べられました。神ご自身がそういうお方だからです。神は嫌々与えてはおられません。神は私たちが祝福する思いをもって進んで与えてくださっています。そのご自身を映し出すかのように、喜んで与える人を神は愛してくださいます。そしてその人にはあらゆる恵みをあふれるばかり与えることが 8 節に述べられました。それは私たちがすべての良いわざにさらに励むようになるためであることも語られました。

今日の最初の 9 節は、このように行う人への励ましの言葉です。これは詩篇 112 篇 9 節からの引用です。ここに「彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた」とありますが、「惜しみなく」と訳されている言葉は「散らす」という意味の言葉です。自らの持てるものの中から困窮している人々のためにまき散らすことです。その行為を指して「彼の義」と言われています。すなわち神の前に正しいと見られる行いであるということです。その彼の義は永遠にとどまります。神の前に永遠に覚えられるのです。これこそ価値あるお金の使い方であるということになります。今、私たちが手にしているこの世の富、この世の財はいつか手放さなければなりません。死後それを持って行くことはできません。そういうこの世の一時的な富を自分のためにだけ使ったら永遠の世界に何一つ残りません。その人はやがて神にこう言われてしまいます。あなたはわたしが授けた富で一体何の良いことをしたのか。あなたはそれをただ自分のためにだけ使ったのか。あなたの義はどこにあるのかと。しかし私たちが今ここで神から預かっている富を、特に必要を覚えている方々を助けるために用いるなら、その義は永遠にとどまると言われています。この地上にある間のみ使うことができるお金を正し

く使うなら永遠にその行いが神に覚えられるというのです。つまりこのような使い方こそ神が願っている使い方であり、神に喜ばれる使い方であるということです。

10 節にさらに励ましが述べられます。ここに私たちに種とパンを与えてくださるのは神であると言われています。この種とは6 節ですでにそのイメージが使われていましたように、私たちに与えられた財、お金を指します。神は私たちに蒔くことができるお金と生活のためのパンを与えてくださっています。神がすべての良きものの供給源なるお方です。この神に感謝して、私たちが与えられている富を貧しい人たちを支えるために蒔くなら、神は何をしてくださるでしょう。ここに神は「種を備え、増やし」とあります。神は蒔くための種を再び備えてくださるばかりでなく、さらに増やしてくださると言われています。その人はさらに豊かに持つ者とされるのです。そしてさらに「あなたがたの義の実を増し加えてくださいます」と続きます。つまりさらに良いわざに励むということです。8 節で見たことと同じです。

次の 11 節も同じことを述べています。「あなたがたは、あらゆる点で豊かになる」とまず言われます。その人が困るようには神はされません。しかしそれは「すべてを惜しみなく与えるようになる」ためです。益々良いわざに励む者となるためなのです。

11 節後半に「それが私たちを通して神への感謝を生み出すのです」とあります。今パウロはエルサレムの貧しい聖徒たちのための献金プロジェクトへの参加を呼びかけています。この献金はパウロたちを通して、このあとエルサレムへ運ばれます。パウロたちはその仲介人です。それがここの「私たちを通して」が意味していることでしょう。こうしてパウロたちを通してエルサレムへ運ばれて行くなれば神への感謝が産み出されるとパウロは言います。これが 12 節以降にもう少し詳しく述べられます。

12 節に「なぜなら、この奉仕の務めは、聖徒たちの欠乏を満たすだけではなく、神に対する多くの感謝を通してますます豊かになるからです」とあります。ここにこの献金もたらす効果が二つ述べられています。一つは「聖徒たちの欠乏を満たす」ことです。生活に困っているエルサレムのクリスチャンたちの実際的な必要を満たすために用いられます。しかしそれだけではありません。この献金を通して神に対する多くの感謝が献げられることとなります。これを受け取る人たちは神に感謝します。これが神から出たことを受け止めて神に感謝するのです。そしてこの感謝を通してますます

ます豊かになると言われています。「豊かになる」という言葉は「あふれ出る」という意味の言葉です。つまりパウロは一言で言えば献金の影響は大きいということを言っています。それはただ人々の実際的な必要を満たすだけではない。それを受けた人々が神に感謝をささげ、さらにそこからあふれ出るものになる。池に何かを投げると、そこから輪を描くように波紋が広がって行くように、献金の行為はただそれだけにとどまらず、感謝を通して、より広い影響を及ぼすのです。周りに波及して行くのです。このような献金の効果を述べてパウロはコリント人たちを励まそうとしています。そのさらなる効果とは何であるかが13節以降にあります。

13節に「この務めが証拠となって、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、自分たちや、すべての人に惜しみなく与えていることを理解して、神をあがめるでしょう」とあります。この言葉を理解するにあたって私たちが考慮に入れるべき背景は、当時のユダヤ人教会と異邦人教会の間にあった不信感と対立です。パウロによる異邦人世界への福音宣教が進むにつれてユダヤ人クリスチャンを中心とする教会と異邦人クリスチャンを中心とする教会との間に軋轢が生じていました。そのまま放置すればキリスト教会は二つに分断されてしまう危険がありました。パウロはそれを防ぐため、むしろ主の教会の一致と交わりを確かなものとするしとして、この献金プロジェクトを行おうとしています。この異邦人諸教会から集めた献金をエルサレムに持って行くならユダヤ人クリスチャンたちは思うわけです。彼ら異邦人クリスチャンたちは「キリストの福音の告白に対して従順である」と。一言で言えば、真の信仰に生きているということです。キリストを信じますと告白しながら、そばで困っている人を助けようとしなない人は、その福音の告白に対して従順であるとは言えません。ヨハネの手紙第一3章17～18節：「この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」しかしパウロが携えて行く献金の内に、異邦人の諸教会がその告白に対して従順である証拠があります。その信仰が真実なものであることをユダヤ人クリスチャンたちは見るのです。

そして「自分たちや、すべての人に惜しみなく与えていることを理解する」とあります。この時の援助献金はエルサレムのクリスチャンたちに対するものですが、彼らがこうしているということは他のすべての人に対しても同じようにすることの現れ

です。これを認め、理解して、ユダヤのクリスチャンは神をあがめるのです。神は確かに異邦人にも真の救いをお与えになったのだ！と。彼らも我々が目指すのと同じ信仰に生きている！と。神は確かに彼らの間にあって働いておられ、このような実りを結ばせてくださったのだ！と。こうしてユダヤの教会は驚きと感謝をもって神をあがめ、賛美するようになります。

そしてさらに彼らは異邦人クリスチャンたちのために祈るようになるというのが14節です。彼らはコリント教会を初めとする異邦人クリスチャンたちのために祈り、さらに慕うようになるとも言われています。神がこの上なく豊かな恵みをもって働いておられることを認めるがゆえにです。つまり自分たちと全く同じ神の民であると認めて、深い親愛の情を持つようになるのです。同じ神の家族、兄弟姉妹と認めて睦み合うようになるのです。これこそパウロがこの献金プロジェクトを通して実現したいと願ったことでした。パウロは異邦人への使徒として召されましたが、ユダヤ人の教会が異邦人の教会を認めないなら、それはそれで構わない。我々は彼らと別に行こう！という態度は決して取りませんでした。教会の頭なるキリストはお一人であり、その体なる教会も一つです。その教会の一致のために彼は心を砕きました。この愛の献金が両者を結ぶ絆となるように、その接着剤となるようにと彼は願い、このプロジェクトを推進しました。

そのパウロは今や確信しています。この献金を通してユダヤ人の教会が異邦人世界における神の救いのみわざを知って神をあがめるようになること、また異邦人クリスチャンたちのために祈り、彼らを慕うようになることを。こうしてユダヤ人の教会と異邦人の教会が主にあって一つの教会であり、一つの交わりに生かされていることが決定的に示されるようになることを。そのことを思って心を動かされ、感極まるようにして発された言葉が最後の15節であると思われます。「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」

この「ことばに表せないほどの賜物」とは何でしょうか。前の節で触れられたコリント教会に注がれた神のこの上なく豊かな恵みでしょうか。その賜物を思って神に感謝します！と言ったのでしょうか。あるいはこの献金を通してユダヤ人の教会と異邦人の教会が一つに結び合うことを思って、「ことばに表せないほどの賜物」と言い、神に感謝すると言ったのでしょうか。どちらも間違いではありませんし、どちらも含ま

れているとは思いますが、ほとんどの注解者が言うのは、パウロがここで特に考えていたのはイエス・キリストのことだろうということです。前の8章9節でパウロはこう述べました。「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」神はこのキリストを私たちへの最大のプレゼントとして与えてくださいました。この神の賜物に、他のすべての恵みは基づいています。パウロは今ユダヤ人の教会と異邦人の教会が主になって一つの群れであることが明らかにされる献金プロジェクトのために骨折っていますが、この奇跡的なわざがもう少しで実現しそうなのは、ただただこの「ことばに表せないほどの賜物のゆえ」です。神がご自身の最愛の一人子を惜しまずに、喜んで私たちに与えてくださったという、私たちの言葉では到底言い尽くせない賜物に基づいて、私たちの他者を顧みる歩み、互いに分かち合う歩み、互いに愛し合う歩みがあります。これらすべての大元にある神の恵みを仰いでパウロは神に感謝をささげていると考えられます。またこのことは、私たちが互いに他者を顧みる愛の行為は、この「ことばに表せないほどの賜物」をいつも見つめ、感謝するところから導かれるものであること、その応答であるべきであることを思わされます。

私たちは今日の御言葉からどのように導かれるべきでしょうか。私たちは10節から、私たちの持ち物はすべて神が備えてくださったものであることを改めて知らされます。私たちはそれらをももちろん自分の生活のために使って良いのです。しかしその与えられているものの中には困っている他の人々、兄弟姉妹、また教会に用いるための分もあるということをおぼわされます。それをそのように用いることがキリストの福音の告白に対して従順に生きるということです。そのための分があるのです。それをそのように用いる時、神は再び種を備えてくださるばかりか、さらに増やしてくださいます。一見手元を離れて失われるように思われても、神が補い、さらに増やしてくださいます。それは私たちが益々そのように用いる道を進むためです。そしてそのようなささげ物は相手の実際の欠乏を満たすだけでなく、多くの感謝を通してあふれ出て、より広い影響をもたらすことが述べられました。私の献げ物を通して益を受けた人が神に感謝をささげ、そこからさらなる動きが起こるのです。そうして神の御名がたたえられ、賛美されることに至ります。またささげた私たちが逆に祈られるという恵みにあずかり、献げた相手の人との間に与えられている交わりがさらに祝福されるということが起こるのです。

神は私たちにご自身にとって最もかけがえのない御子を与えてくださいました。その「ことばに表せないほどの賜物」を感謝して、私たちも与えられているものの中から、御心に従って、惜しみなく、祝福の思いをもってささげ、蒔く者たちへ導かれたいと思います。そしてこのことを大いに喜んでくださる神によって私たち自身の生活も十分に支えられて、さらに御心が地で行われ、御国が広げられ、神の御名があがめられるために仕え、用いられる幸いに生かされる者たちとされたいと願います。